

## 調査報告

### 神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第6次調査報告(2004年度)

早勢 加葉    江川 真澄    中野 弥生  
吉田 泰子    磯部 裕史    小泉 玲子

#### はじめに

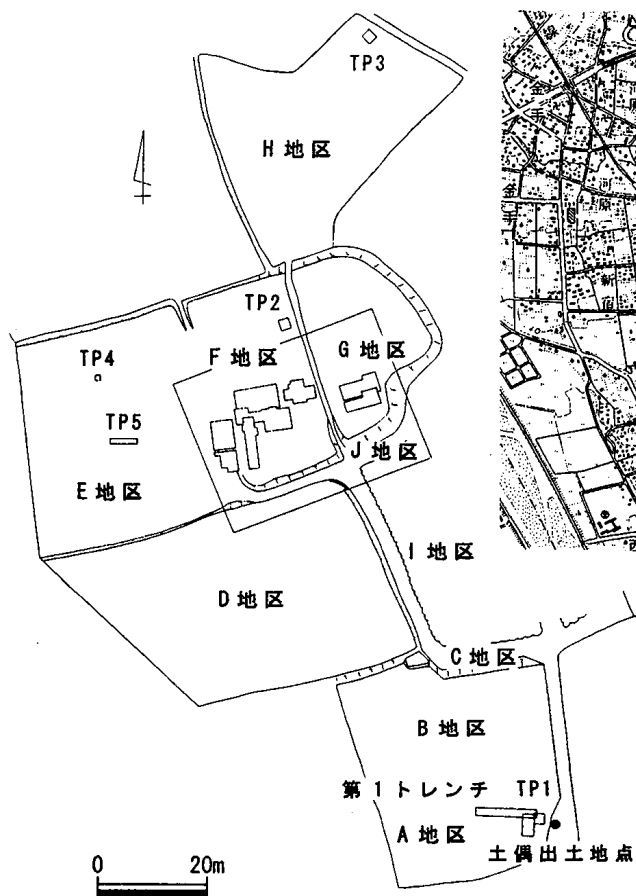
中屋敷遺跡は神奈川県足柄上郡大井町に存在する遺跡で、1934(昭和9)年に偶然、土偶形容器(現、国指定重要文化財)が出土したことで注目された。しかし、その後も詳細が不明な遺跡であった。そこで、昭和女子大学歴史文化学科では、遺跡の性格を明らかにすることを目的として中屋敷遺跡調査団を組織し、平成11～15年まで第1～5次調査にわたり発掘調査を実施してきた。本概報は、平成16年3月に実施した第6次調査の報告である。調査の経緯と方法、層序、検出遺構、出土遺物について報告し、成果についてまとめている。報告は発掘担当で分担し、各項目の末尾に担当を明記した。第6次調査では、複数の遺構と多数の遺物を検出することが出来たが、紙面の都合により、遺物については特徴的なもののみ紹介するにとどめた。現在、分析中の資料もあることから、最終的な成果については平成17年度刊行予定の本報告の記載をもって調査団の見解とすることをお断りしておく。調査・整理作業は歴史文化学科事業として取り組み<sup>1</sup>、整理作業は私学助成財団より「特色ある教育の推進」事業として採択を受けている。

#### 1 調査の経緯と方法(図1)

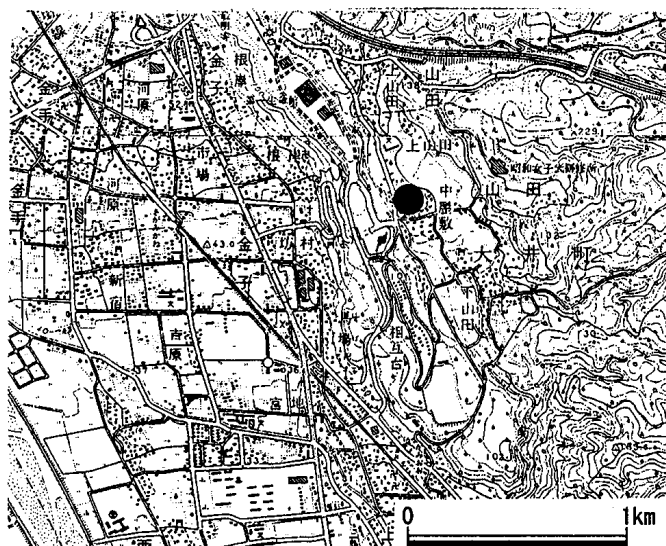
調査地F・G区では、第2次調査で2号土坑、第3次調査で11号土坑、第4次調査で12・13号土坑、第5次調査で15・16・17号土坑(17号土坑は確認のみ)の計7基の土坑を検出している<sup>2</sup>。この内、2・12・13・15・16号土坑は弥生時代前期後葉に想定される土器が伴っている<sup>3</sup>。これらの土坑が近接した距離で検出されていること、土器の時期にほとんど差が見られないことから、複数の土坑がまとまりをもって存在したと推測された。未調査部分にもまだ同様の遺構の存在が想定されたため、新たな遺構の検出と広がりを確認することを目的として、第5次調査で15・16号土坑を検出したF区第4トレンチの北側、さらにその東側の未調査部分を調査することとした。その結果、新たに土坑を検出するに至り、当初の予想を裏付ける成果を得ることが出来た。各調査区および検出遺構の詳細については後述する。

調査は、土坑の検出を第一目的としたため、土坑検出の可能性のある第5層上面まで掘り下げることを方針とし、手作業で実施した。総面積は51.87㎡であった。

発掘調査は3月13日から24日の12日間、本学研修施設で合宿しながら実施した。



1 見取り図



2 遺跡の位置 ●は中屋敷遺跡

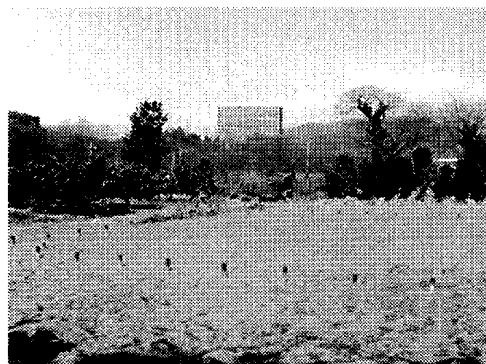
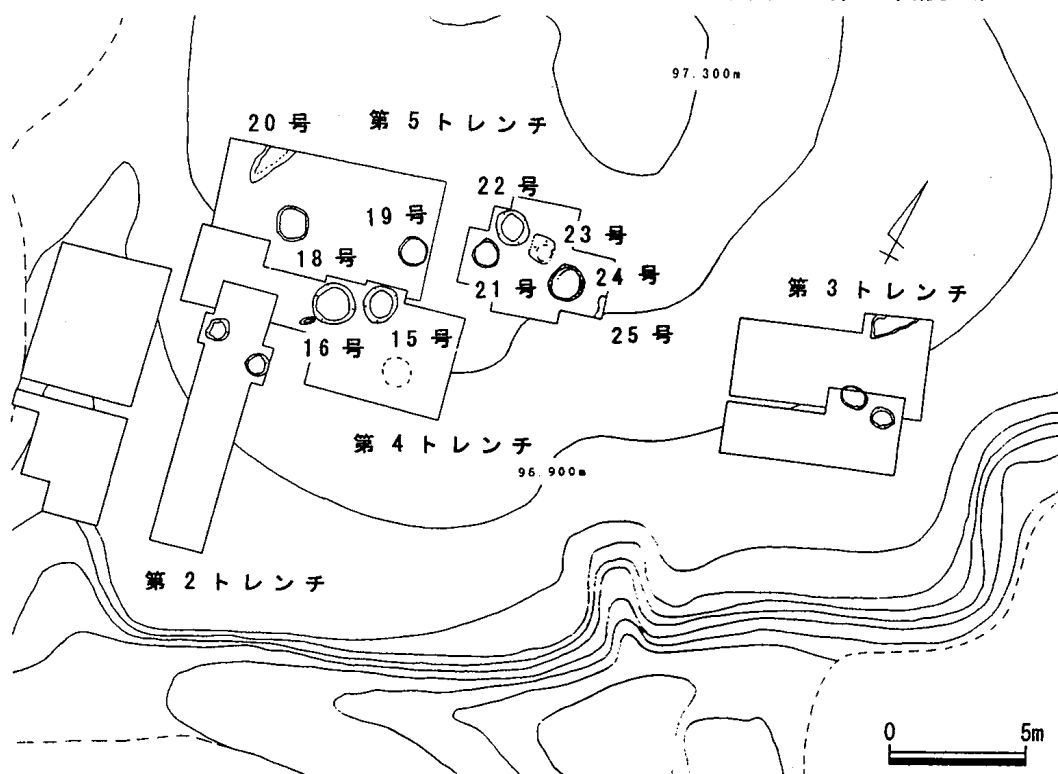


写真1 第6次調査区



3 第6次調査区 (S=1/400)

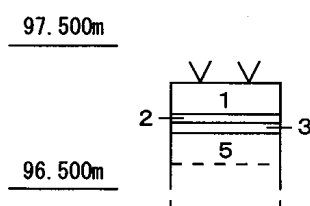
図1 遺跡の位置と調査区

12日に機材搬入を行い、13日に調査区を設定、表土を除去し、一部掘り下げを開始した。23日には調査の終了した調査区の埋め戻しを行い、24日に残りの調査区を埋め戻し、撤収した。整理作業は4月以降世田谷キャンパスで実施している。

(小泉)

## 2 基本層序 (図2)

層序は基本的に第3次調査の層序に準ずる。ここでは、第6次調査で調査対象とした1～5層の特徴について記す。



(第5トレンチ)

図2 土層柱状図

1層 **表土層**：耕作土層。約40cm堆積。径3mm以下の赤色スコリアを少量含む。径10mm以下の小礫を10～30%程度含み、下層になる程含有量が多い。しまり、粘性ともになし。現代～縄文時代の遺物を含む。

2層 **黒灰色スコリア層 (S-25=HO)**：径1～3mm程度の黒灰色スコリアを約5～10cmの厚さでブロック状に含む。スコリアは1707年の宝永年間に堆積した火山灰の2次堆積である。しまり、粘性ともになし。

遺物は出土していない。

3層 **明褐色土層**：径5mm以下の橙色スコリア、径1mm以下の褐色スコリア、白色スコリアを少量含み、径10mm以下の小礫を少量含む。また径5mm以下の炭化物を微量に含む。しまり、粘性ともにより。弥生時代初頭の遺物を含む。

4層 **黄褐色土層**：径5～10mmの黒色・橙色スコリア、径2～3mmの褐色スコリアをやや多く含み、パミスが多量に含む。また径10mm以下の礫をやや多く含む。しまり、粘性ともにより。弥生時代前期後葉の遺物を含む。

5層 **黒褐色スコリア層**：径3mm以下の褐色・白色スコリア、径5mm程度の橙色スコリアをやや多く含む。径10mm程度の橙色スコリアを微量に含む。径3mm以下の小礫、パミスをやや多く含む。しまり、粘性ともにより。縄文時代前期末～中期初頭、中期後半の遺物を含み、18～25号土坑の検出面である。(早勢)

## 3 調査区

### 第5トレンチ (図3・4)

第5次調査での15号土坑・16号土坑の検出に伴い、同時期の遺構確認を目的に第4トレンチ (以下4トレ) の北側に一部重なるように設定し、西側をa区、東側をb区とした。いずれも2層を目安に掘り進め、5層上面で遺構を検出した。

a区は、第5次調査で行なった4トレと一部重なるように、南北4.5m、東西8.0m

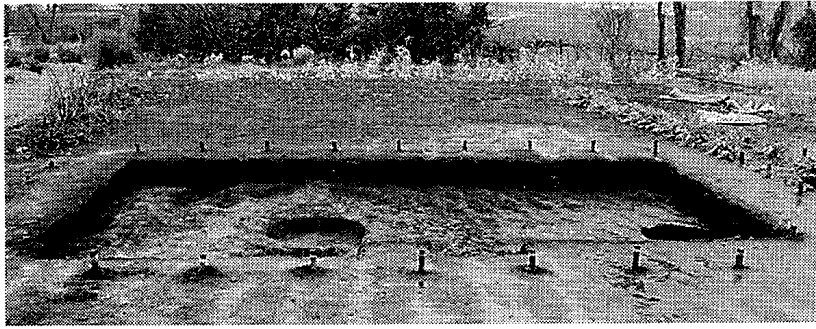


写真2 a区(南から)

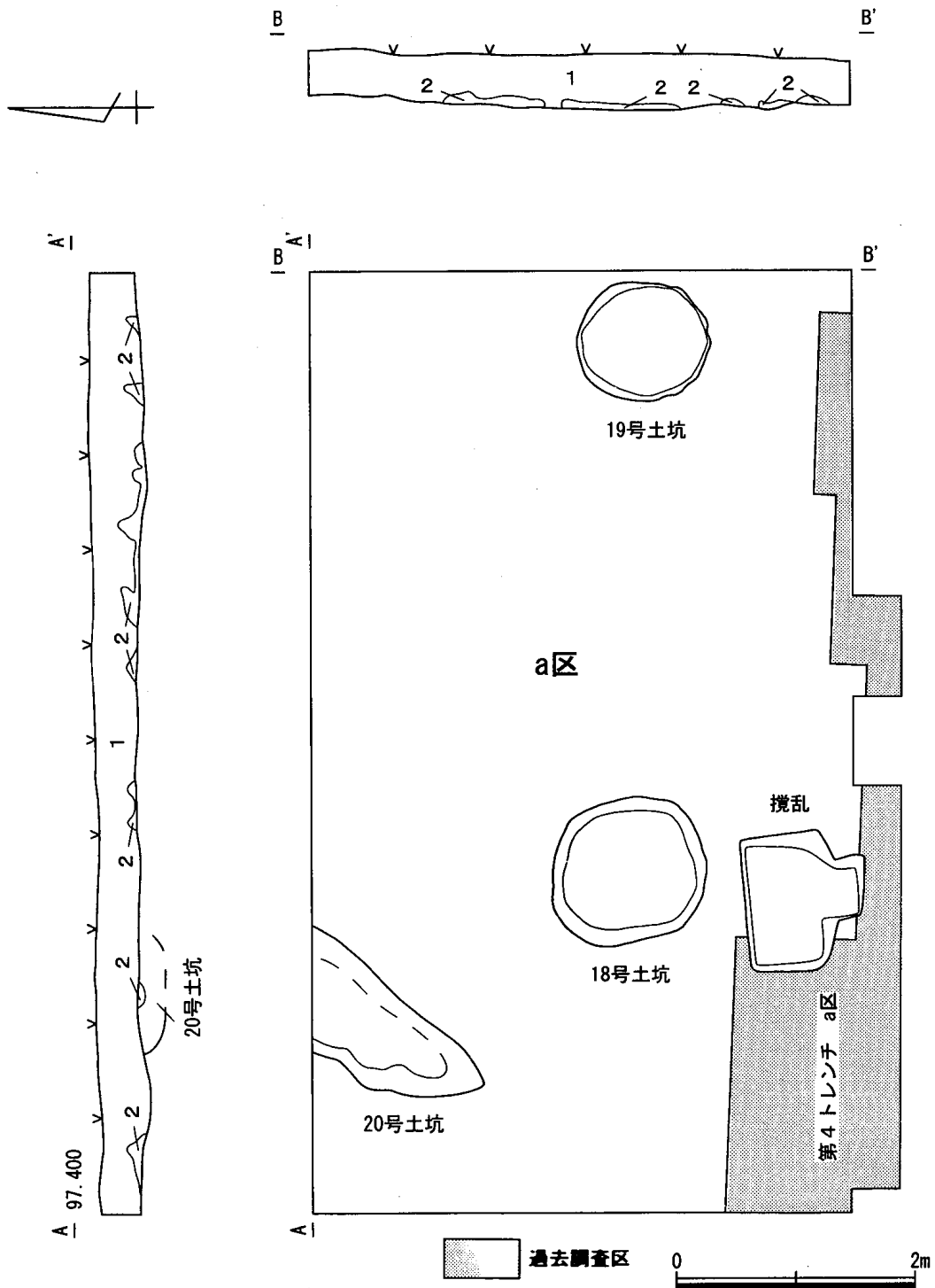


図3 a区トレンチ (S=1/80)

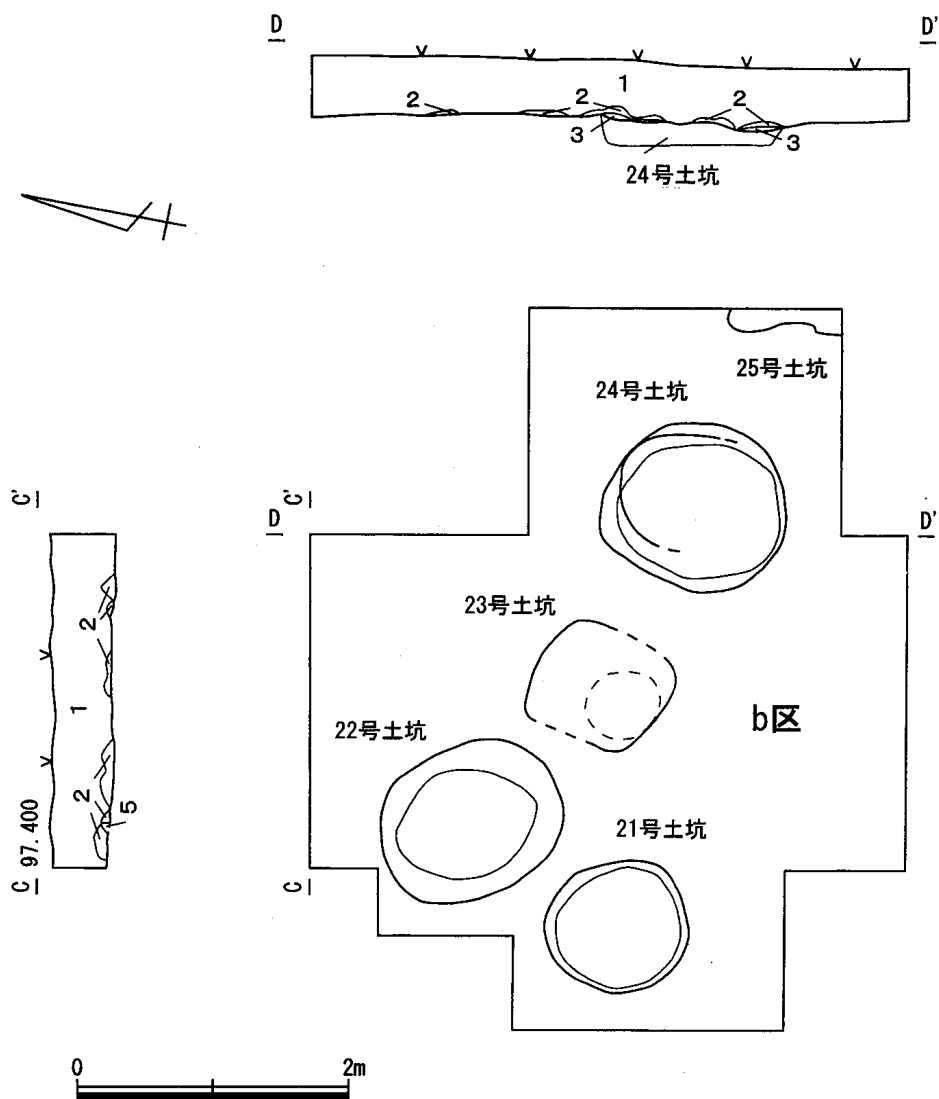


写真3 b区(東から)

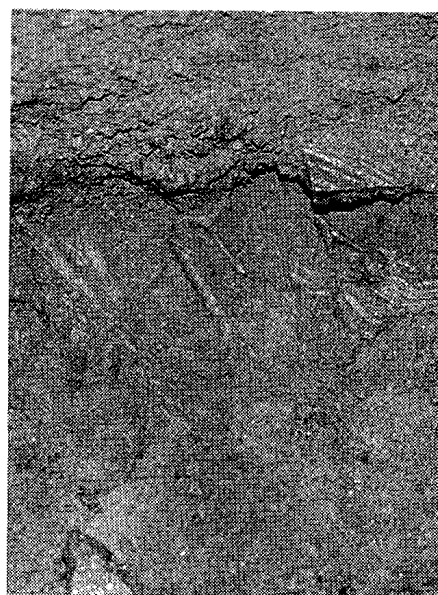


写真4 22号土坑出土草本類

図4 b区トレンチ (S=1/80)

に設定した。調査を進める中で、4トレとの位置関係を把握するため、南側に南北0.4m、東西3.4m、さらに南北0.4m、東西0.9mの2ヶ所の拡張を行なった。a区では3基の遺構を検出し、検出した順に18・19・20号土坑とした。なお20号土坑は層序の乱れから、風倒木であると判断した。

b区は、南北4.5m、東西2.5mに設定した。土坑の検出に伴って西側を南北3.0m、東西0.5m拡張し、そこからさらに南北2.0m、東西0.7m拡張した。東側は南北2.3m、東西1.7m拡張した。土坑は6基検出し、検出した順に21～25号とした。なお25号土坑は調査区の南西隅に一部検出されたが、未調査である。(早勢・江川)

### 検出した土坑

次に検出した土坑ごとに、その規模・形態、土層、主な出土遺物について報告する。なお土坑の深さについては、確認面からの深さを記した。

#### (1) 18号土坑 (図5)

南北1.3m、東西1.2mの円形を呈し、深さ0.2mであった。覆土は3層確認され、遺物は土器片28点、推定個体数6点、微量の炭化材が出土した。

##### ① 土層

- 1層 **黒灰色スコリア層**：基本層序の第2層に相当する。
- 2層 **褐色土層**：径2～3mmの橙色スコリアを微量に含む。径1mmの白色粒子をやや微量に含む。しまり、粘性ともになし。
- 3層 **暗褐色土層**：径1～4mmの橙色スコリアをやや少量含む。径1mmの白色粒子、5～8mmの炭化材を微量に含む。小礫を含む。しまりあり、粘性なし。

##### ② 出土遺物

・土器 (図5-1～4 S=1/4)

- 1 壺形土器の口縁部破片。口唇部ケズリで、口縁部に山状の突起を有する外面はミガキで、沈線による変形工字文が施される。内面はヨコナデで、後にミガキが施される。胎土中に白色粒子、輝石、小礫を含む。
- 2 壺形土器の底部破片。外面には縦、斜め回転のLR縄文が施される。底部には網代痕がみられる。内面はヨコナデである。胎土中に金雲母、白色粒子、黒色粒子、輝石、石英を含む。
- 3 壺形土器の口縁部から胴部の破片。口唇部はケズリ、外面は口縁部から頸部にかけて横方向のケズリ、縦、横、斜め回転のLR縄文が施される。内面はヨコナデ。胎土中に金雲母、白色粒子、黒色粒子、輝石、小礫を含む。
- 4 壺形土器の胴部破片。外面は無節のL縄文を施し、内面はヘラナデ。胎土中に橙色スコリア、金雲母、白色粒子、輝石を含む。(中野)

#### (2) 19号土坑 (図6)

南北1.1m、東西1.0mの円形を呈し、深さ0.4mの土坑であった。断面がフラスコ

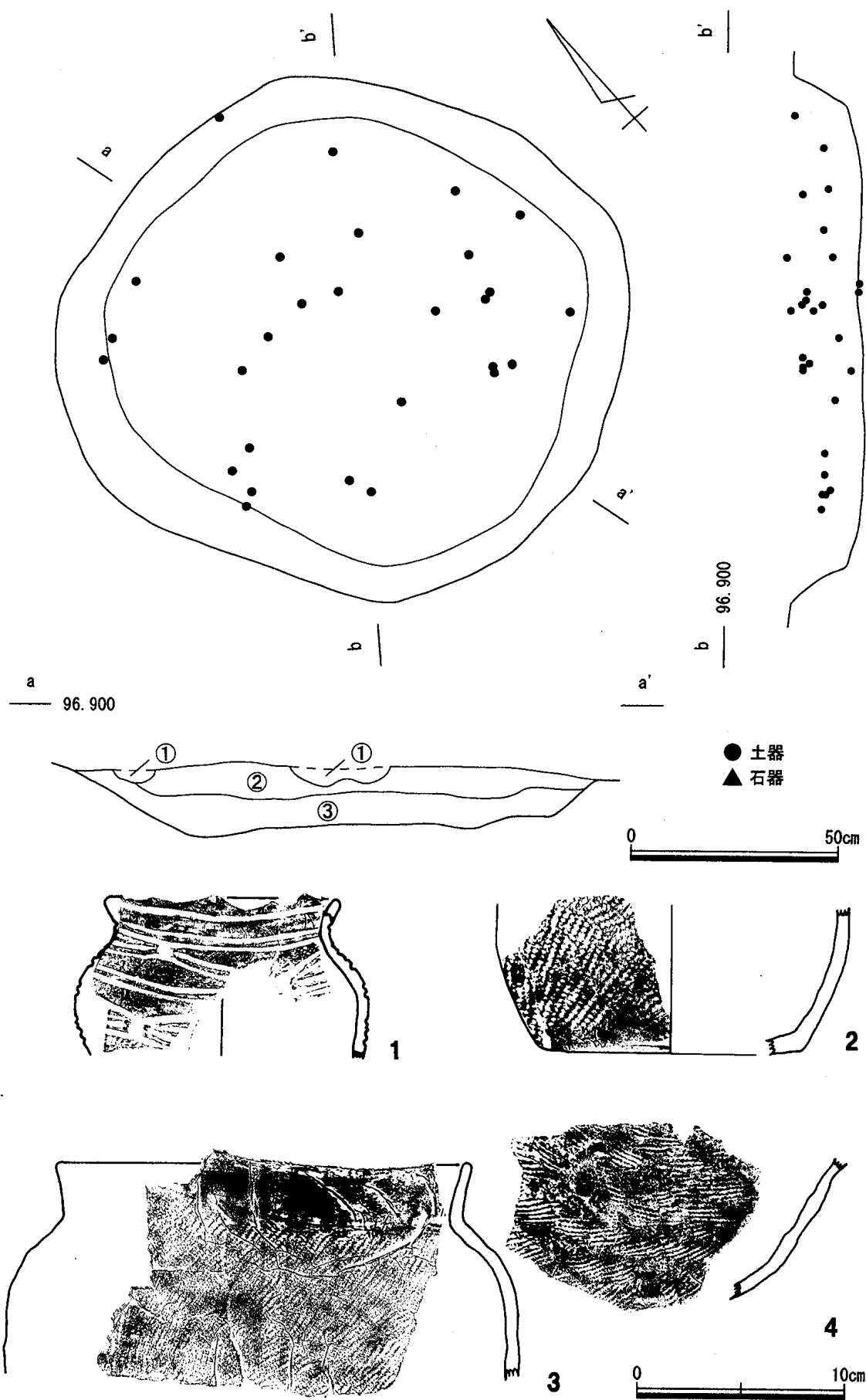


图5 18号土坑 (S=1/20)

状を呈することを一部で確認した。覆土は5層確認され、遺物は土器片81点、推定個体数33点、石器25点、多量の炭化物・骨片が出土した。

#### ① 土層

1層 **黒灰色スコリア層**：基本層序の第2層に相当する。

2層 **褐色土層**：径1～3mmの橙色スコリア、径1mmの白色粒子、径3～5mmの炭化材をやや少量含む。しまりなし、粘性あり。掘り込みの可能性あり。

3層 **明褐色土層**：径1～3mmの橙色スコリア、径1mmの白色粒子を微量に含む。径5mmの小礫を少量含む。しまり、粘性ともになし。

4層 **黒褐色土層**：径1mmの橙色スコリアを少量含む。径1mmの白色粒子、3～5mmの小礫をやや少量含む。5～10mmの炭化物を多量に含む。また、炭化物は中心部に集中して出土している。骨片を多少含む。しまりあり、粘性なし。

5層 **黄褐色土層**：径1mmの白色粒子、橙色スコリアを微量含む。炭化材は5層に比べて少なく、しまりのある粘土質の層である。

#### ② 出土遺物

・土器（図6-1～3 S=1/3）

- 1 甕形土器の口縁部破片。口唇部ナデで、口縁部に横回転のLR縄文が施される。縄文下にヘラナデがみられる。内面はヨコナデである。胎土中に白色粒子、黒色粒子、輝石、石英、小礫を含む。
- 2 甕形土器の口縁部破片。口唇部ナデで、波状口縁を呈しており、外面に縦方向の茎束条痕を施す。内面はヘラナデ。胎土中に白色粒子、石英を含む。
- 3 甕形土器の口縁部破片。口唇部ナデで、外面に横方向の茎束条痕を施す。胎土中に白色粒子、輝石、石英を含む。（吉田）

・石器（図6-4・5 S=2/3、6 S=1/4）

- 4 黒曜石製の石鏃。平面形は平基有茎で、側縁はほぼ直線状を呈する。主要剥離面は不明瞭だが、裏面中央部に礫面と考えられる粗い平坦面が確認でき、素材の一面は礫面の可能性がある。いくつか幅広の剥離面がみられ、ある程度形状を整える剥離を施した後、最終的な調整を行なったと考えられる。調整は正面を先に行ない、続いて裏面にと進んだことが窺える。正面左側縁下端が欠失したような形で左右非対称をなしているが、欠損部に特徴的な折損面はみられない。製作時もしくは使用時の欠損を再加工した可能性が高く、未成品である可能性が高い。法量は、長さ2.1cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重量0.5g。
- 5 チャート製の石鏃。石質は黄灰色を呈し、黒色の線が走る。一部色調が茶色を呈するが、被熱によるものではないと考えられる。平面形は凹基有茎で、側縁はほぼ直線状を呈する。正面左側の基部および基部欠損である。内側にまで及ぶ調整によって主要剥離面は観察できず、素材形状は不明である。一部幅広の剥離面がみられることから、ある程度形状を整える剥離を施した後、最終的な



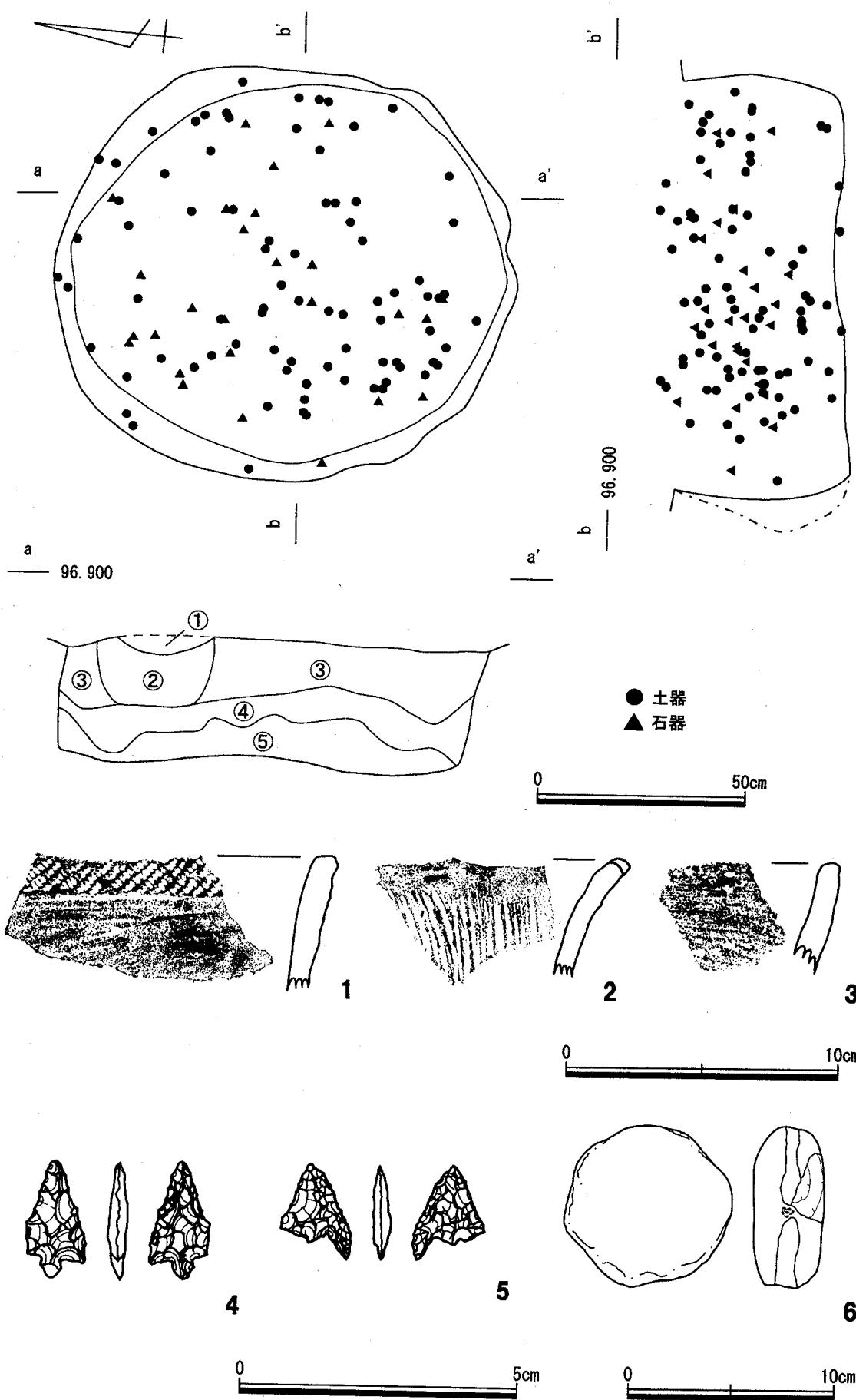


图6 19号土坑 (S=1/20)

調整を行なったと考えられる。法量は、長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重量0.4g。

- 6 安山岩製の敲石。円礫を素材としており、周縁は風化によると考えられる剥落が認められるが、わずかに残存している部分に敲打痕が観察できる。残存する敲打痕が周縁部全体に確認されることから、全周に敲打痕が及んでいた可能性が高い。法量は、長さ7.8cm、幅8.1cm、厚さ3.4cm、重量328.8g。 (早勢)

(3) 21号土坑 (図7)

南北1.0m、東西1.0mの円形を呈し、深さは0.6mであった。覆土は4層確認され、遺物は土器片86点、推定個体数13点、石器34点、多量の炭化材・骨片が出土した。

① 土層

1層 **黒灰色スコリア層**：基本層序の第2層に相当する。

2層 **にぶい赤褐色土層**：径1～6mmの橙色スコリアをやや少量含む。径1mmの白色粒子を微量に含む。径10mm程度の炭化材をやや少量含む。しまり、粘性ともにあり。

3層 **にぶい赤褐色土層**：径1～6mmの橙色スコリアをやや少量含む。径1mmの白色粒子を微量に含む。径10mm程度の炭化材、3～5mmの骨片を少量含む。しまりあり、粘性なし。2層に類似するが、2層よりしまりあり。

4層 **黒褐色**：径1～4mmの橙色スコリア、径1mmの白色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともにあり。

② 出土遺物

・土器 (図7-1・2 S=1/4)

- 1 壺形土器の口縁部破片。口唇部に横回転のLR縄文がみられ、沈線による変形工字文が施される。内面はヘラナデ。胎土中に白色粒子、橙色粒子、輝石を含む。第5次調査で報告した16号土坑出土の土器 (掲載No.19) と接合した。今回は紙面の都合上、接合した状態では紹介することができなかった。
- 2 甕形土器の口縁部破片。波状口縁で、口縁部外面にLR縄文を施し、下部は無文でヘラナデ。内面はヘラナデで輪積み痕が残る。口唇部にナデを施す。胎土中に白色粒子、輝石、石英、小礫を含む。

・石器 (図7-3・4 S=2/3、5 S=1/3)

- 3 黒曜石製の石鏃。欠損・再生等の痕跡はみられない。平面形は凹基無茎、側縁はほぼ直線を呈する。薄い剥片を素材としていることから、二次加工は周縁部に留まる傾向にある。先端上方に素材の打点が存在していたため、先端部付近が最大厚を呈している。そのため二次加工も先端部が最も入念であったと考えられる。法量は、長さ1.4cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重量は0.3g。
- 4 黒曜石製の石鏃。平面形は凹基無茎、側縁は内湾状を呈する。二次加工が全面を覆っていることから、素材形状は不明である。正面の二次加工は左側縁・右

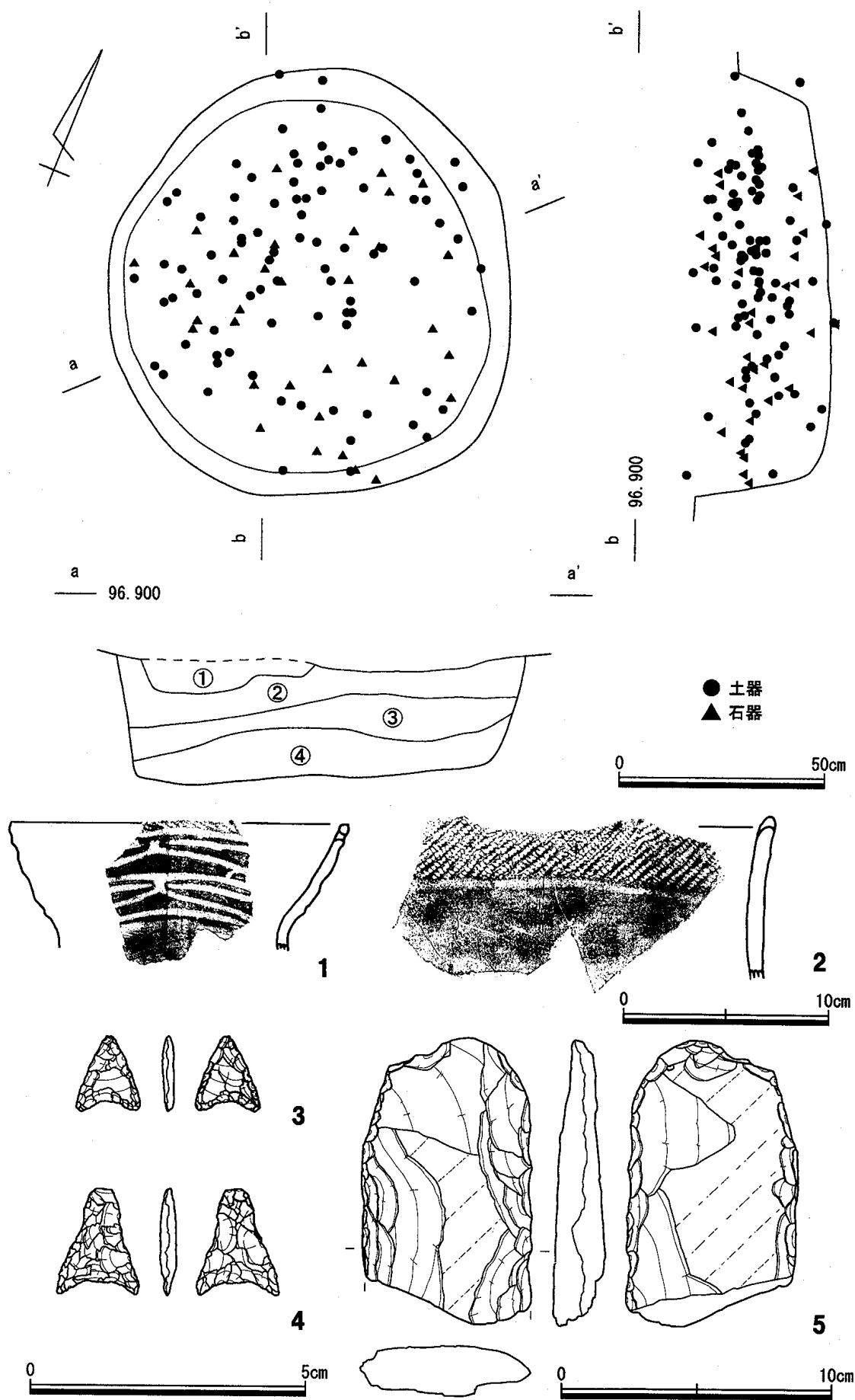


图7 21号土坑 (S=1/20)

側縁の順に行なっただと考えられる。側縁の二次加工は正面側に新しい剥離痕が集中する。先端部に衝撃剥離痕と考えられる欠損がみられ、また裏面側には欠損部位からの剥離が観察されることから、再生加工という可能性も考えられる。法量は、長さ1.9cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重量は0.6g。

- 5 緑泥片岩製の打製石斧。平面形状は短冊形を呈し、上下に欠損している。明瞭な刃部加工が観察できないため、基部破片と判断した。素材は節理で割れた扁平な礫で、側縁は連続的な加工が直線状に施され、左側縁には節理面除去を目的とした敲打による潰れが観察される。基端部には使用と考えられる剥離面が認められる。法量は、長さ6.9cm、幅4.2cm、厚さ1.3cm、重量161.2g。(早勢)

(4) 22号土坑(図8~10)

南北1.3m、東西1.3mの楕円形を呈し、深さ0.7mの土坑であった。覆土は7層確認され、遺物は土器片291点、推定個体数34点、石器33点、炭化種実遺体(トチノキ種実)4点、多量の炭化材・骨片が出土した。

① 土層

1層 **褐色土層**：径1~2mmの橙色スコリア、径1mm以下の白色スコリアをやや少量含む。径1mm以下の黒色スコリアを微量に含む。しまりややなし。粘性なし。

2層 **黒褐色土層**：径5~10mmの橙色スコリア、径5~10mmの小礫を少量含む。径1mm以下の白色スコリア、径5~10mmの炭化物をやや少量含む。径1mm以下の赤色スコリアを微量に含む。しまり、粘性ともになし。

3層 **黒色土層**：炭化物の堆積層である。上部に炭化した草本類を多く含む。一部に焼土を含む。しまり、粘性ともになし。

4層 **炭化物焼土層**：炭化物と焼土がブロック状に存在する。しまり、粘性共になし。

5層 **黒褐色土層**：径5~10mmの小礫をやや少量含む。径1mm以下の白色スコリア、径1mm以下の橙色スコリア、径1mm以下の黒色スコリアを微量に含む。しまり、粘性ともにややなし。

6層 **炭化物焼土層**：炭化物と焼土が混在する層である。しまり、粘性共になし。

7層 **明赤褐色の焼土層**：しまりややなし、粘性なし。

② 出土遺物

・土器(図10-1 S=1/4、2~9 S=1/3)

- 1 甕形土器の口縁部破片。口唇部はケズリで、口縁部に突起を有する。外面は斜め方向の茎束条痕を施す。内面はヨコナデである。胎土中に白色粒子、橙色粒子、黒色粒子を含む。文様や胎土が類似することから、第5次調査で報告した16号土坑出土の土器(掲載No.5)と同一個体と思われる。

- 2 壺形土器の口縁部破片。口縁部の折り返し突帯には、押捺がみられる。外面は突帯下にナデ、その下に斜め方向に条痕が施され、内面はヨコナデがみられる。胎土中に白色スコリア、金雲母、白色粒子、輝石を含む。胎土は砂質である。

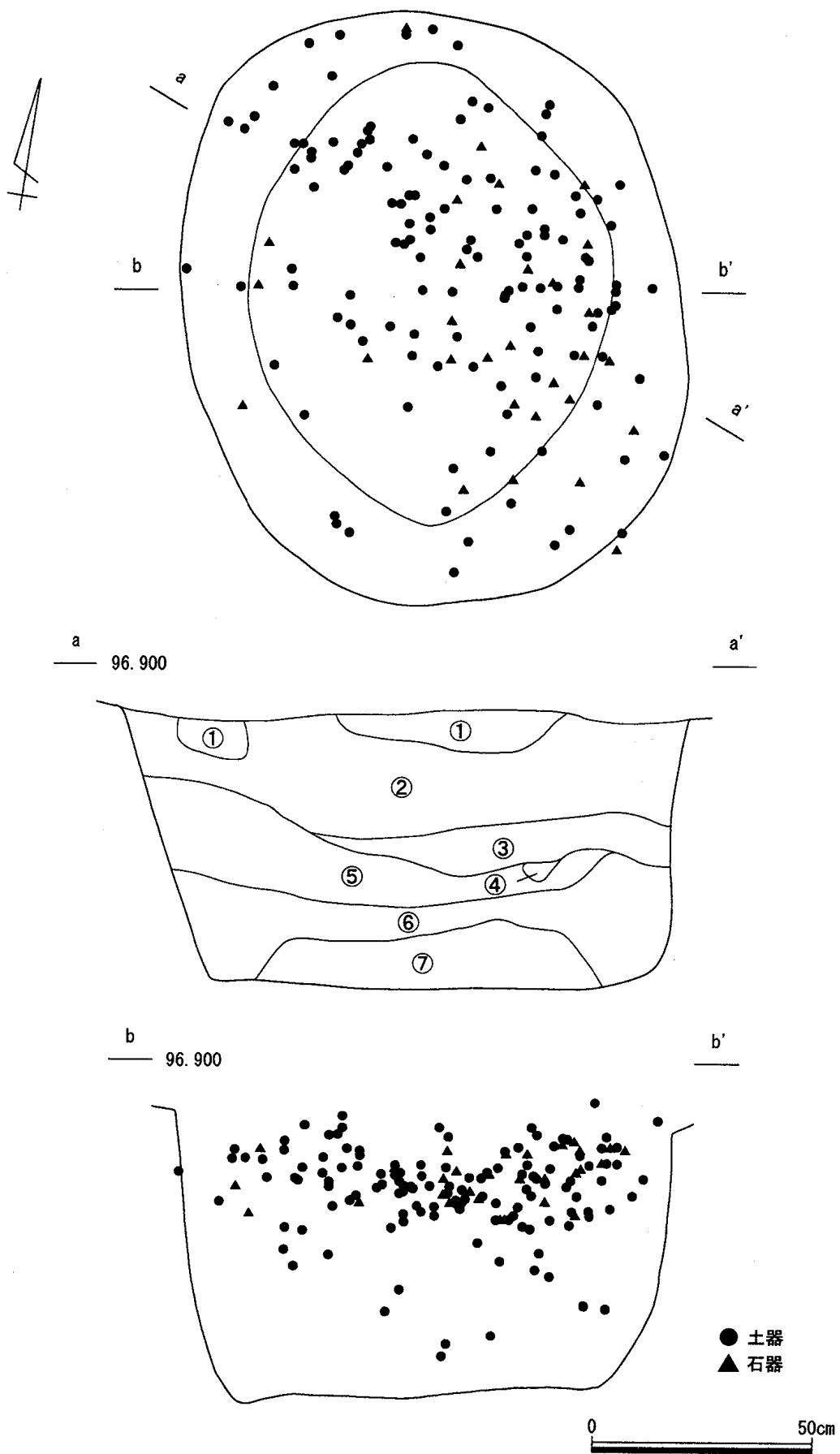
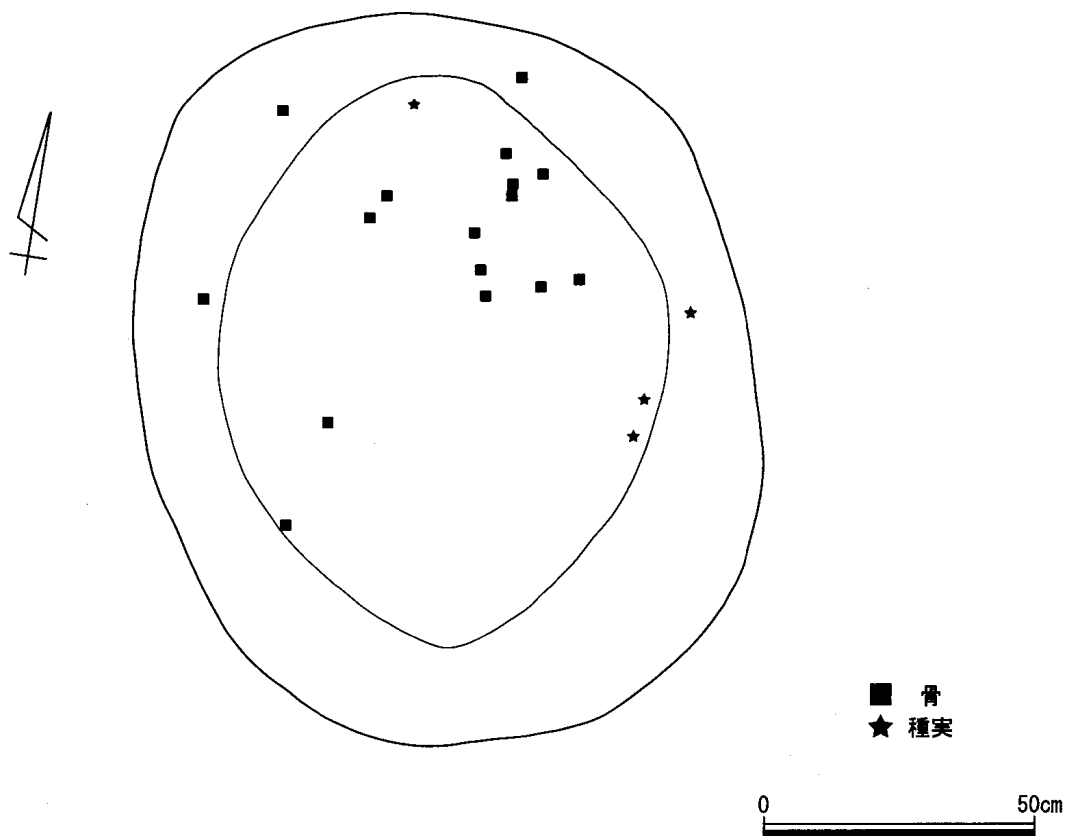
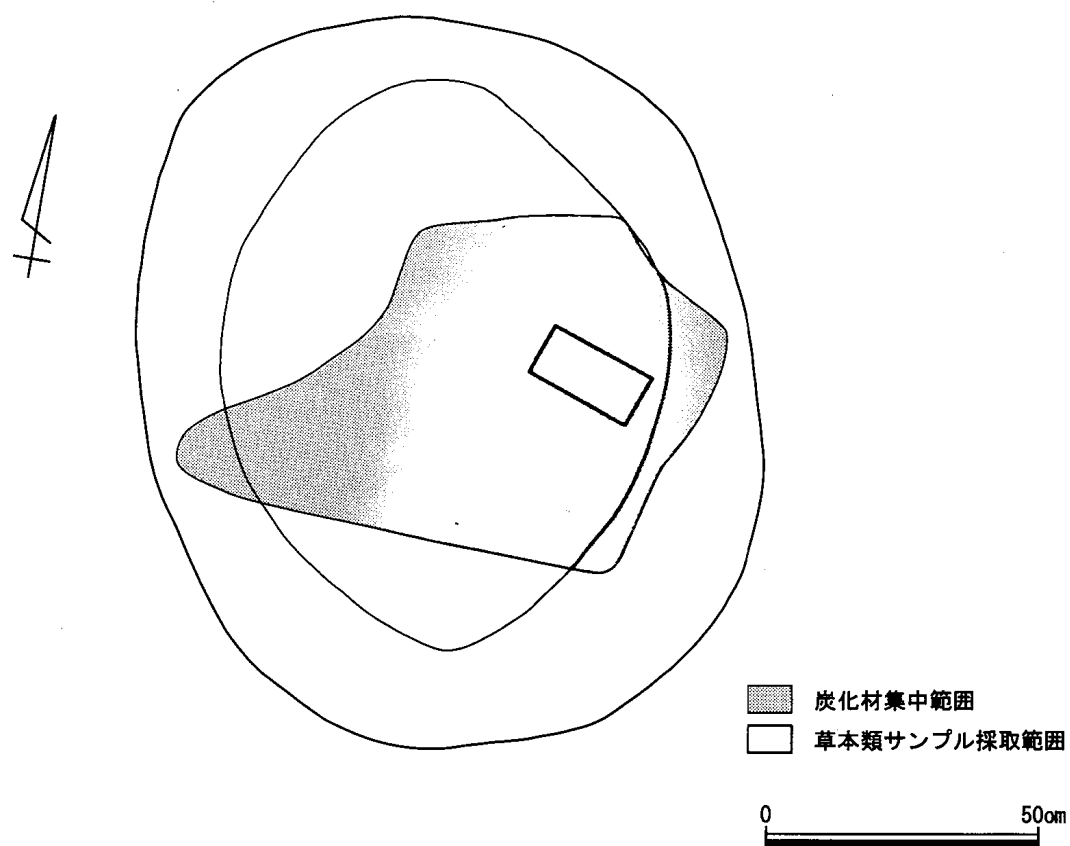


图 8 22号土坑 ① (S=1/20)



1 骨・種実出土状況



2 炭化材集中範囲

図9 22号土坑② (S=1/20)

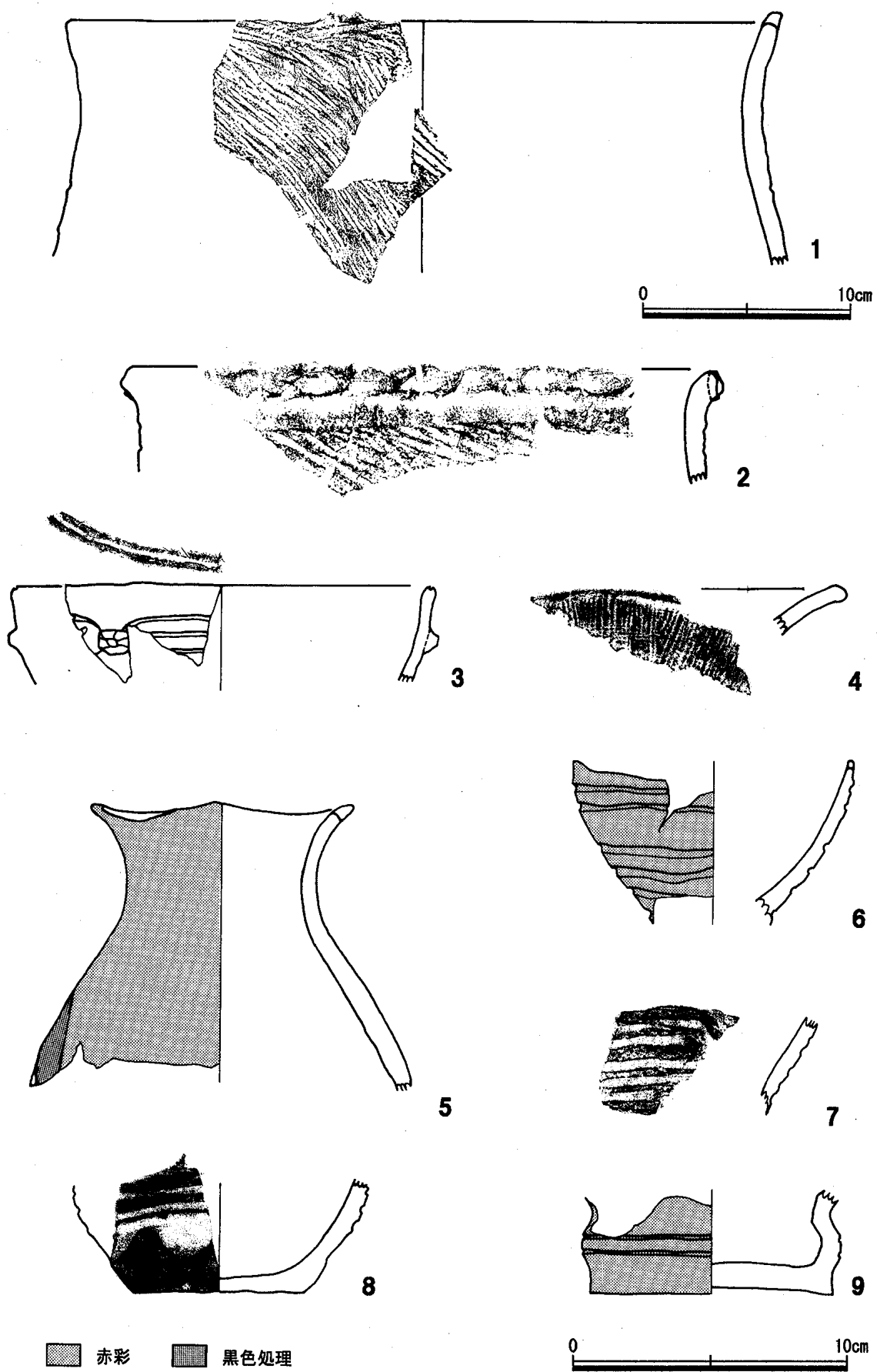


图 10 22号土坑出土遗物

- 3 鉢形土器の口縁部破片。口唇部に沈線が施される。外面は沈線で文様が施され、一部突起を有する。内面はナデ。胎土中に金雲母、白色粒子、輝石、小礫を含む。
- 4 壺形土器の口縁部破片。口縁はナデ。外面は口縁下に縦方向のヘラナデ。内面は横方向のヘラナデの後、赤彩が施される。胎土中に輝石、小礫を含む。
- 5 壺形土器の口縁部から胴部の破片。口唇部はヘラナデ後、ケズリ。波状口縁を呈する。外面は頸部ヨコナデ後、胴部から頸部へ縦方向にヘラケズリ。外面に赤彩が施されるが、一部黒色部がある。内面は横方向のヘラナデで、輪積み痕が顕著にみられる。胎土中に金雲母、白色粒子、黒色粒子、小礫を含む。第5次調査で報告した16号土坑出土の土器（掲載No.7a.b）と接合した。
- 6 鉢形土器の口縁部から胴部の破片。口唇部にはケズリが施され、口縁部に山状の突起を4単位有する。胴部は内外面ともにミガキ、外面には横方向の沈線がみられる。黒色処理後に赤彩が施される。胎土中に橙色スコリア、白色粒子、黒色粒子、輝石を含む。第5次調査で報告した16号土坑出土の土器（掲載No.6）と接合した。
- 7 甕もしくは壺形土器の胴部破片。外面はミガキ、横方向の沈線が施される。内面はヘラナデである。胎土中に白色粒子、小礫を含む。
- 8 壺形土器の底部破片。外面はミガキ、赤彩が施される。胴部には沈線が、底部付近には波状の文様がみられる。内面はナデである。胎土中に白色スコリア、橙色スコリア、金雲母、白色粒子、黒色粒子、小礫を含む。
- 9 壺形土器の底部破片。底部付近が肥厚している。外面はミガキの後、横方向の沈線が施され、一部に赤彩が残る。内面はミガキ。胎土中に金雲母、白色粒子、輝石、砂粒を含む。

・炭化材、骨片他（図9）

22号土坑からは、有機質の遺物、骨片の出土が多く認められた。土坑北側を掘り下げたところ、2層下部より灰色がかった炭化物を集中的に確認し、2層最下部東側で5cmの厚さで炭化した草本類が密集した部分を検出した。その内20cm×10cm×5cmを土壌サンプルとして採取した。さらに、3層上部で炭化物集中部を検出した。集中範囲は、北東部から南西部にかけて不定形の広がりを見せた。また、炭化トチノキの種実を2層最下部の西側と6層の東側で計4点確認した。

骨片は、2層と4層から出土し、特に4層で目立ち、北東部から出土する傾向があった。骨片で同定できたものでは、シカの角（2層最下部）、シカの歯（4層上部の北西部）が出土している。4層出土の骨片の多くは最下部で出土した。

(5) 23号土坑（図11）

十分な調査を行なうことができなかったが、現状から、南北1.0m、東西0.9mの隅丸方形で深さ0.4mの土坑であると推定する。覆土の確認作業は行っていない。遺物は土器片12点、推定個体数1点、石器1点が出土した。



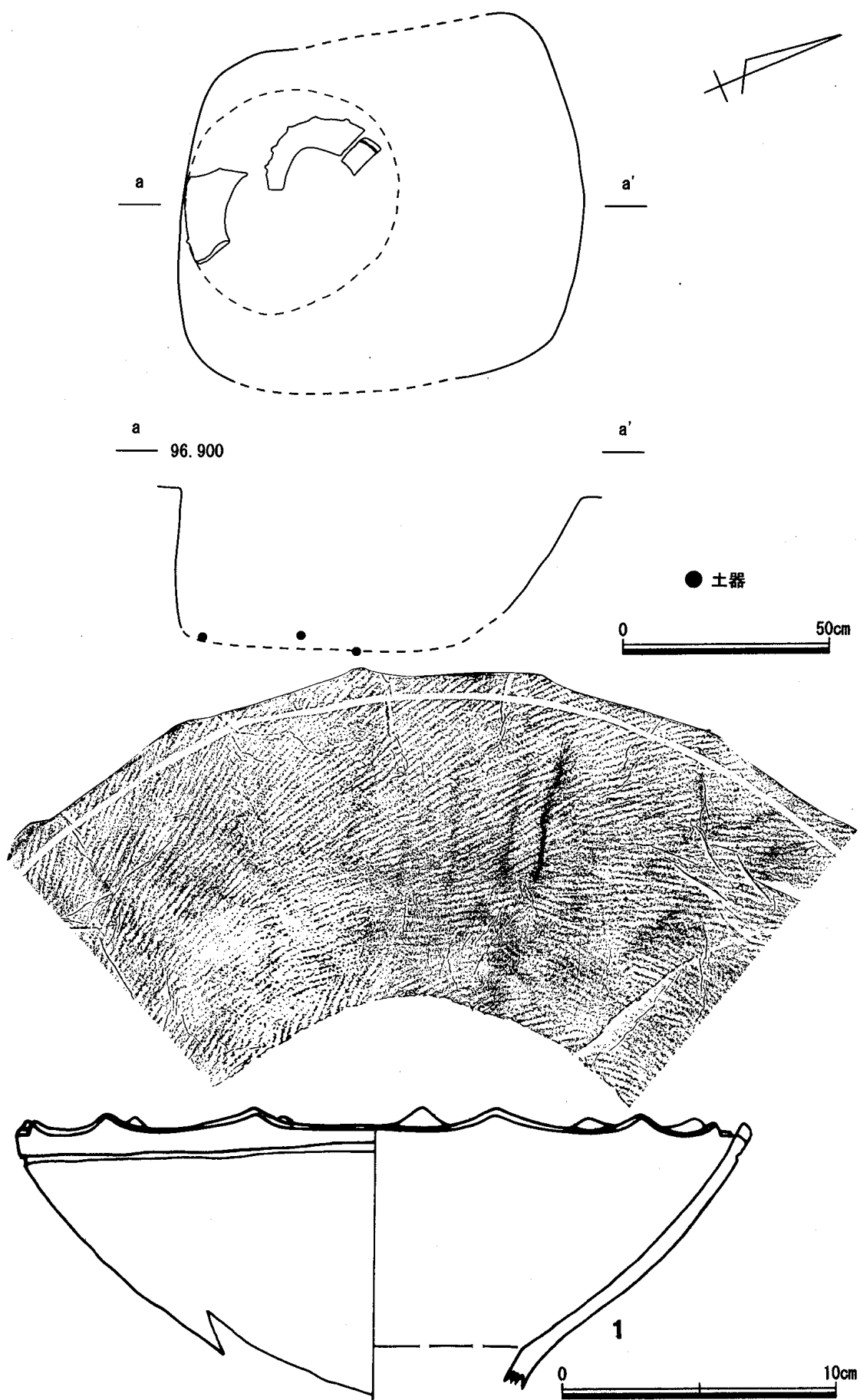


图 11 23号土坑 (S=1/20)

① 出土遺物 (図11-1 S=1/3)

- 1 鉢形土器の口縁部から胴部の破片で全周する。口唇部はケズリが施され、口縁部に山状の突起を13単位有する。外面は横、斜め回転のLR縄文を、口縁部下に沈線を施す。内面はヨコナデである。胎土中に金雲母、白色粒子、黒色粒子、輝石、石英、小礫を含む。  
(早勢・江川・磯部)

(6) 24号土坑 (図12~14)

南北1.4m、東西1.3mの円形を呈し、深さは0.6mであった。土坑の覆土は、7層に分けられ、調査時は1~2層を入れ子状になった別の土坑と考えた。しかし整理作業を進めた結果、遺物の出土状況と接合関係から、単独土坑と判断するに至った。なお、土坑底面が5層下部である可能性も考えられる。遺物は土器片274点、推定個体数25点、石器34点、多量の炭化物、骨片が出土した。

① 土層

1層 **暗褐色土層**：径10mm程度のスコリア、径10mm以下の炭化材を少量含む。径3~4mm以下の黄白色スコリアを含む。しまり、粘性ともになし。土器片、骨片が少量出土している層である。

2層 **暗褐色土層**：径10mm以下のスコリア、炭化材を多量に含む。土器片、骨片が多量に出土した。しまりなし、粘性あり。

3層 **暗褐色土層**：径5mm以下の炭化材、径1~2mmの黄白色スコリアを少量含む。径10mm程度のスコリアを含む。しまり、粘性ともになく、粒子は粗い。

4層 **暗褐色土層**：3層に類似するが、しまり、粘性ともにあり。

5層 **暗褐色土層**：径20mm以下の炭化材を多量に含む。径20~30mmの小礫を少量含む。土器片、骨片とも多量に含む層である。また、2層と接するあたりで、遺物が集中的に出土していた。しまりなし、粘性あり。

6層 **暗褐色土層**：径1~2mmの黄白色スコリアを多量に含む。遺物是他層に比べて少量しか出土していない。しまり、粘性ともにあり。

7層 **暗褐色土層**：5層に類似するが、径10mm以下の炭化材を少量含み、遺物量は少ない。

② 出土遺物 (図13-1~3 S=1/3、4 S=1/6、図14-5~7 S=1/3)

- 1 壺形土器の、口縁部から胴部の破片。口唇部はケズリで、波状口縁を呈する。口縁部から頸部にかけてミガキが、頸部以下は横方向の茎束条痕がみられる。また外面は、焼成がまだらで、炭化物が一部付着する。内面はヘラケズリである。胎土中に白色粒子、小礫を含む。
- 2 壺形土器の口縁部破片。頸部から口縁部にかけて外反する。波状口縁を有し、口唇部にナデ、口縁下に横方向の沈線が3本施される。外面はミガキで、内面はヨコナデ。胎土中に橙色スコリア、金雲母、白色粒子、石英を含む。
- 3 甕形土器の口縁部破片。口唇部はケズリで、口縁部に丸棒状工具による押捺を

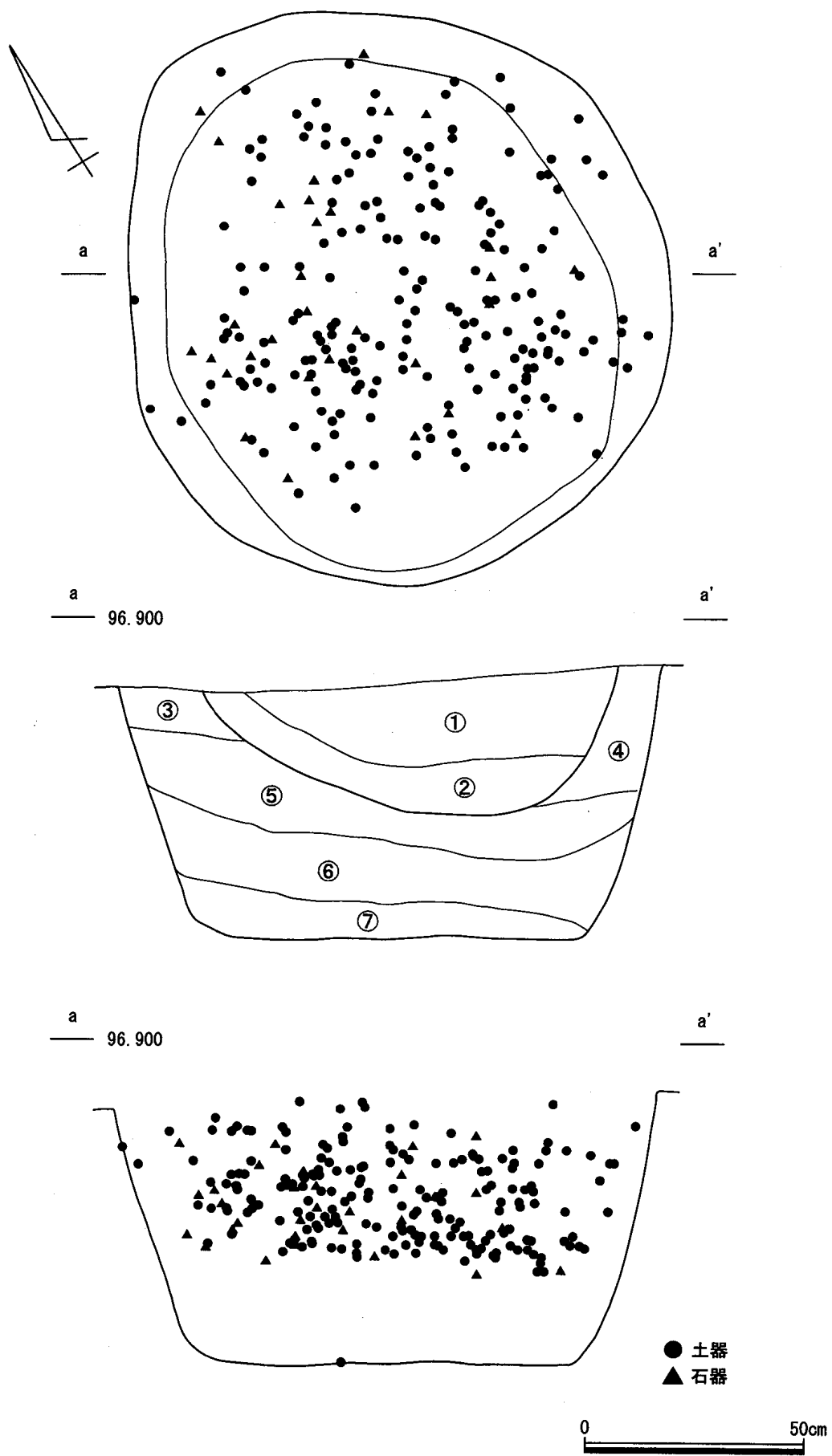


图 12 24号土坑 (S=1/20)

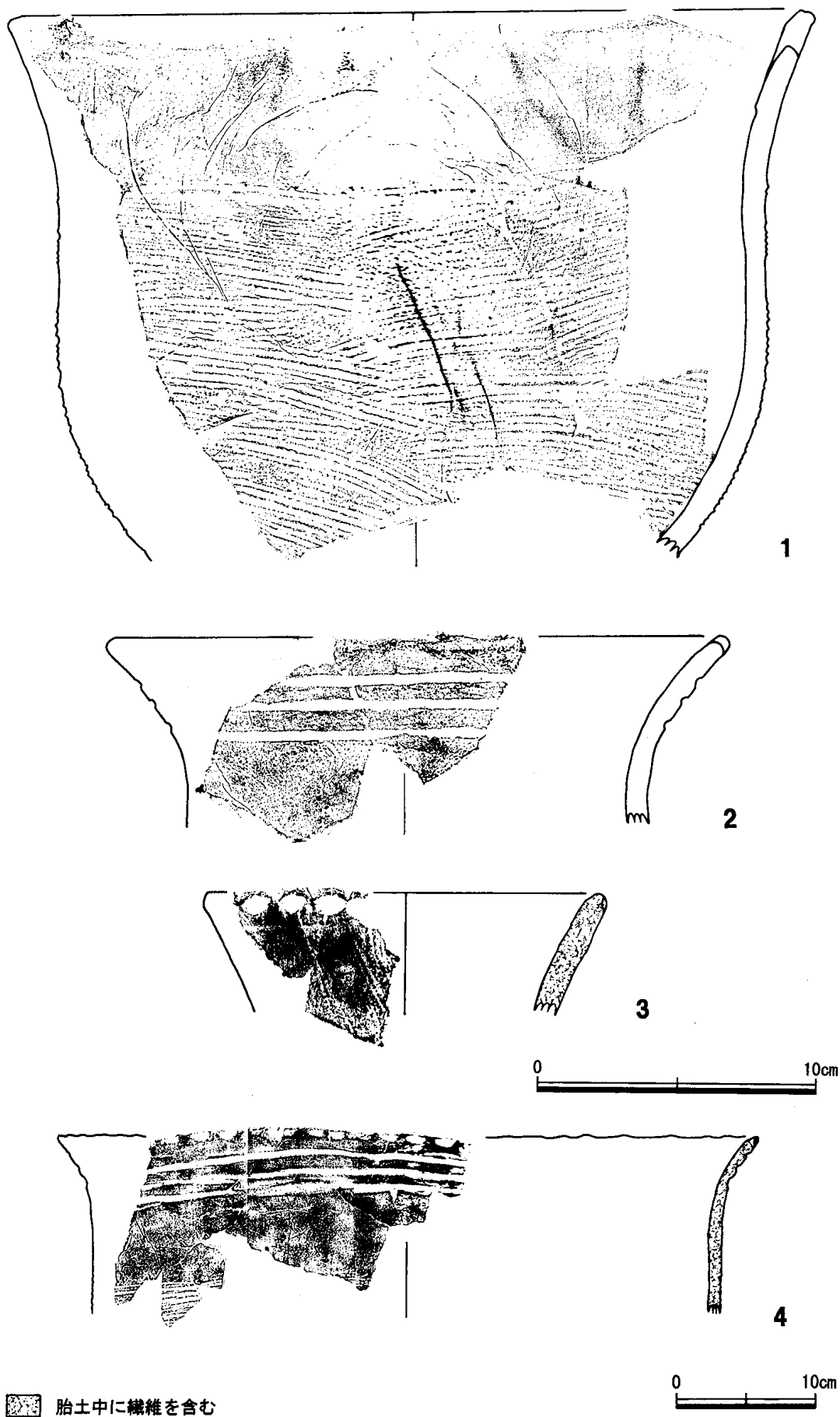


図 13 24号土坑出土遺物

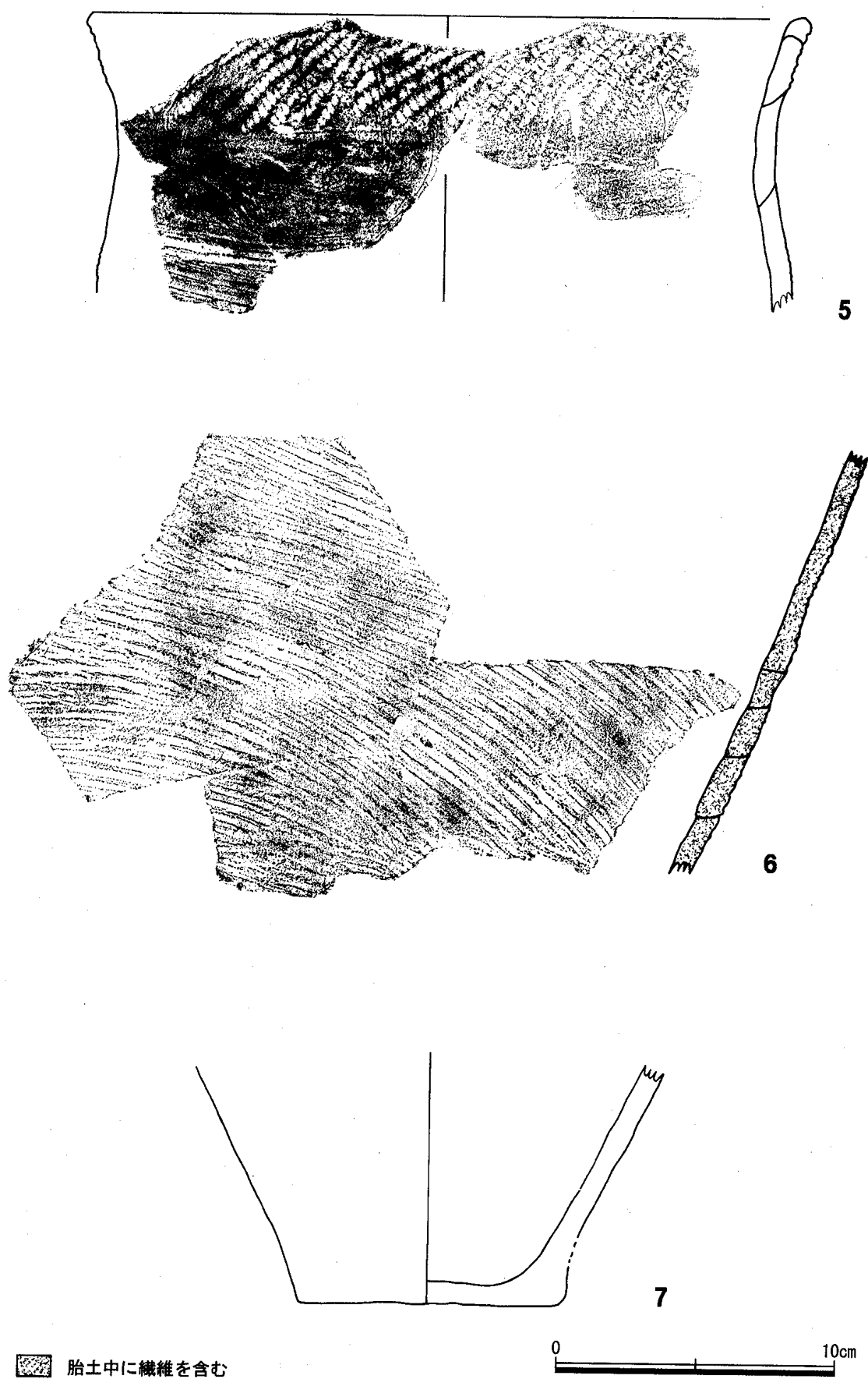


図 14 24号土坑出土遺物

施す。外面に縦方向の条痕、内面はヘラナデ。胎土中に白色スコリア、橙色スコリア、白色粒子、輝石、繊維を含む。

- 4 甕形土器の口縁部破片。口唇部に指頭による押捺がみられる。口縁下にはヘラ状工具による太い沈線があり、胴部には横方向の茎束条痕を施す。沈線と条痕の間はヨコナデで、内面はヘラナデである。胎土中に白色スコリア、橙色スコリア、輝石、繊維を含む。
- 5 甕形土器の口縁部破片。波状口縁で、口唇部ナデである。口縁部に横方向のLR縄文、その下にヘラケズリ、胴部に横方向の条痕が施される。内面はヨコナデで、輪積み痕が顕著にみられる。胎土中に白色粒子、輝石、石英を含む。
- 6 甕形土器の胴部破片。外面は斜方向の条痕を施し、一部に炭化物が付着する。内面はヨコナデで、輪積み痕が顕著にみられる。胎土中に白色スコリア、黒色粒子、白色粒子、橙色粒子、石英、繊維を含む。
- 7 壺形土器の底部破片。外面の底部及び側面にヘラケズリが施される。内面の底部付近に炭化物が帯状に付着している。胎土中に白色粒子、黒色粒子、輝石、石英、小礫を含む。特に内面底部は石英、長石を多く含む。(江川)

#### 4 調査の成果について

第6次調査において遺構・遺物・自然科学分析で得られた成果をまとめ、今後の課題について確認しておきたい。まず、遺構・遺物では、弥生時代前期と考えられる土坑を8基(1基は未調査)検出したことが挙げられる。このことにより、第1次～6次調査で同時期の可能性のある土坑検出総数は15基となった。これらの土坑は東西40m、南北10mの範囲内に存在し、互いの距離が近接していること、複数の土坑間で接合資料が確認できたことから、土坑は単発的に作られたものではなく、まとまりをもった遺構と捉え、土坑群を形成していたと考えたい。調査区Gの南端は一部削平された状況を呈しているため、本来平坦面がさらに南に延びていたと考えられる。17号土坑以南の空白区域を中心として、土坑の分布がさらに南に展開し、環状を呈していた可能性もある。土器は沈線による変形工字文・磨消浮帯文・茎束条痕文・突帯文・口縁部縄文施文土器などが出土している。工字文の交点を削り広げる技法(図5-1、7-1)、強く屈曲する無文の口縁をもち胴部に細かい縄文を施す例(図5-3)はいずれも東北からの影響、もしくは搬入品の存在を伺わせる。また、口縁部に縄文帯を持つ土器は波状口縁を呈し、縄文帯下に沈線による区画(図6-1、7-2)、もしくは段をもち(図14-5)、口縁部下は無文で胴部に横方向の条痕を施す。内面に輪積み痕を残す傾向が見られる。条痕文は、貝殻条痕・細密条痕は見られない。また、突帯文土器、沈線文土器の存在などは、東海・中部地域からの影響を受けていることを想定させる。小破片であるが、遠賀川式の可能性が

想定される土器（図10-4）も含まれている。このような土器の様相は、一部搬入品も想定されるが、東北地方、中部・東海地域の東西からの強い影響のもとに在地生産された土器が多いことを伺わせる。時期は、大洞A'併行もしくは直後の時期で、荒海、砂沢併行期と捉え、弥生時代前期後葉と考えたい。

今回の調査では、遺構内から石鏃、打製石斧、敲石などの石器が出土したことも成果の一つである。このような狩猟具、採集具、加工具の出土は、背後の生業活動を伺わせ、集落の存在を伺わせる。また、石核や剥片、調整剥片も覆土から出土していることから、製作工程の復元も視野に入れて検討を続けたい。

上記以外の出土遺物で注目されるのは、各土坑で検出された炭化物である。中でも22号土坑では、焼土と共に大量の炭化物が混在していた。また、この焼土・炭化物層上部では面的に広がる炭化した草本類と考えられる植物が検出された。そこで、これらの炭化物を対象に各種の自然科学分析を実施した<sup>4</sup>。まず、各土坑ごとに炭化材もしくは土器外面付着物によるAMS法による放射性炭素年代測定を実施した。その結果は、18・24号土坑の炭化材でやや古めのデータが出たものの、おおむね紀元前540年から380年におさまるものであった。また、22号土坑の草本類を対象とした樹種同定では単子葉類が主体で、一部はススキ属類似・タケ亜科が同定された。他の炭化材は、イヌシデ節、ヤマウルシ、アオキ、ハイノキ属の細い枝材であった。22号土坑で調査中に検出した炭化種実とは、トチノキの種実であった。その同定作業中、草本類の分析用にサンプリングした土壌の中からイネの炭化胚乳が2点検出された。また、プラント・オパール分析によるとイネの穎部珪酸体破片（粃殻）、キビ族・ウシクサ族・ネザサ節型機動細胞珪酸体（葉や茎の部分）が含まれているとされ、現世コムギの葉を灰化するとみられる泡状の珪酸体からコムギの存在についても可能性が指摘された。そこで、大学に持ち帰った炭化物・焼土層の土壌の一部を0.25mmと0.5mmの篩を用いて定量的に浮遊選別・水洗選別を実施したところ、複数の炭化イネ胚乳および穎を検出するに至った。さらに炭化アワ胚乳および穎、キビ胚乳などの雑穀が多量に含まれていることも確認できた（写真5）。検出したイネについてもAMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、紀元前5世紀後半

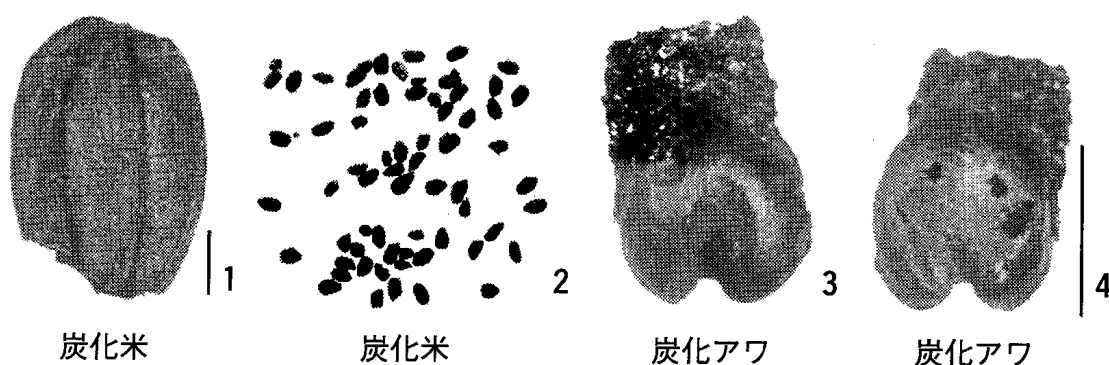


写真5 22号土坑出土炭化米・アワ（1・4右下の線が1mm）

から4世紀前半の結果を得た。イネは土1kg中に平均して50点程度含まれている。現在、選別・同定作業を実施中であり、詳細については後日報告の機会を設けたい。

土坑覆土からは、多くの骨も出土している。19号土坑ではシカの歯、22号土坑ではシカの歯・角が検出され、21・24号土坑ではイノシシの歯が検出された。こうしたことから、出土したその他の骨も獣骨である可能性が高いと考えられる。また、獣骨のほとんどは火を受けていると思われる。

以上の調査結果を踏まえ、土坑の性格について考えてみたい。土坑の形状は、土坑の上面は削平されていることから正確な規模・形状は不明であるが、平面形はいずれもほぼ円形を呈し、断面は19号土坑で袋状の断面を呈することが確認されたものの他の土坑では明確ではなく、むしろ底面は皿状を呈し緩やかに開きながら立ち上がる形態であると推測される。また、土坑覆土の土層は、水平に堆積していることから自然堆積ではなく人為的に埋められたことが想定される。出土遺物の出土状況は、土器片・獣骨片・石器・炭化物が混在し、土器も獣骨も小破片で完全な形になるものが確認できないこと、22号土坑から焼土が検出されているものの土坑壁面に火を受けた痕跡が確認できなかったことから、いずれも土坑外で生じたものが廃棄された状況を示すものと考ええる。以上のことから、土坑は廃棄坑として利用されたものと考えたい。また、断面が袋状を呈する例もあることから、当初貯蔵穴として使われたものが廃棄坑に転用された可能性も高いと考ええる。

土坑には当地の人々の生業活動をうかがわせる情報が多く含まれ、貴重な成果を得たと考えている。資料の少ない当該期において年代測定、樹種同定を実施することができたことも今後にむけて有効な成果であったと考える。中でも、現時点で関東における遺構内出土の例としては最古級となるイネの検出、その他の穀物の存在、さらにそれらが縄文時代の伝統的な食材であるトチなどの堅果類と共伴したことは、弥生時代初頭の稲作の導入過程を考える上で当遺跡の成果が果たす役割は大きいと自負している。

現在、22号土坑覆土の種実同定、樹種同定、プラントオパール分析、土坑内出土黒曜石の産地推定の分析を実施中であり、これらの自然科学分析の結果を参考にしつつ、中屋敷遺跡の性格を明らかにして行きたい。さらに、今後の課題としては、土坑群の範囲を把握すること、土坑を残した人々の住居の検出。第6次調査で検出されたイネが、遺跡周辺で栽培されたものか否かについて明らかにするための稲作遺構の検出が挙げられる。

## おわりに

調査の実現にあたって、地権者である小宮操氏並びにご家族の方々にご理解とご協力をいただいたことをこの場を借りてお礼申し上げたい。自主的に多くの時間を



割いて発掘・整理作業に取り組んできた学生達の労をねぎらうと共に、現場に駆けつけてくれた卒業生の面々、ご指導いただいた関係諸氏に深謝したい。今後ご指導、ご教示を賜れば幸いである。

本学における当遺跡での調査は諸般の事情で、残念ながら今回をもって終了することとなった。当初、土偶形容器に関連した遺構の検出を目的として取り組んだが、調査地の予想以上の攪乱により、同時期の包含層の存在は言えるものの、それ以上の成果を挙げることは出来なかった。しかし、調査を継続する中で、弥生時代前期の土坑群を検出するに至った。最終の6次調査ではイネ、雑穀の検出のおまけも付いた。これらの成果もひとえに、歴代の調査参加学生の努力と熱意のたまものである。あらためて拍手を送りたい。当地は、関東の弥生時代初頭期の人々の生活を復元する上で貴重な遺跡であることから、実体解明の機会がいつの日か訪れることを祈念してやまない。

(小泉)

なお、調査・整理作業に協力・ご指導いただいた次の方々にお礼申し上げます。  
秋本雅彦、安藤広道、五十嵐睦、大坂拓、大井町教育委員会、かながわ考古学財団、倉石広太、小林謙一、設楽博己、嶋津まい子、昭和女子大学学園本部・生活環境学科・教育支援センター・東明学林、田尾敏正、谷口肇、鳥巢あゆみ、中島将太、中村耕作、中村賢太郎、根岸洋、(株)パレオ・ラボ、御堂島正、横井奏

---

## 注

- 1 **発掘参加者** 団長：山本暉久（昭和女子大学大学院生活機構研究科教授）、調査主任：小泉玲子（同人間文化学部歴史文化学科助教授）、調査員：石井寛子・領家玲美・鈴木由貴子（同大学院生活機構研究科修士課程）、江川真澄・早勢加菜（同人間文化学部歴史文化学科4年）、調査員補助：中野弥生・吉田泰子（同2年）、磯部裕史・小池利春（國學院大學文学部史学科1年）、参与：佐々木由香、館まりこ、今井明子、多崎美沙（昭和女子大学OG）

**整理作業参加者** 石井寛子・鈴木由貴子・江川真澄・早勢加菜・中野弥生・吉田泰子・岡野佐知子・岩井良栄（昭和女子大学）、磯部裕史・石船康晴（國學院大學）

- 2 第2次～5次調査の成果は以下の概報・報告による。

館まりこ・佐々木由香他2001「神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第2次調査報告（2000年度）『昭和女子大学文化史研究』5号、昭和女子大学文化史学会

今井明子・藤井恵他2002「神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第3次調査報告（2001年度）『昭和女子大学文化史研究』6号、昭和女子大学文化史学会

石井寛子・領家玲美他2003「神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第4次調査報

告（2002年度）『昭和女子大学文化史研究』7号、昭和女子大学文化史学会  
鈴木由貴子・半田素子他2004「神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第5次調査  
報告（2003年度）『昭和女子大学文化史研究』8号、昭和女子大学文化史学会  
山本暉久・小泉玲子2004「南西関東における初期弥生遺跡の研究—中屋敷遺跡  
の成果について—」『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』

- 3 第2次～5次調査出土土器の時期については、概報他（注2）で弥生時代前期  
後葉～弥生時代中期初頭としてきた。しかし、設楽博己2005「中屋敷遺跡出土  
土偶形容器の年代について」『駒澤考古』30号の見解、谷口肇の教示を参考に  
弥生時代前期後葉の範囲に収まる時期のものと捉え直したい。
- 4 自然科学分析は、（株）パレオ・ラボの協力を得た。AMS法による放射性炭素  
年代測定については、パレオ・ラボAMS年代測定グループ（小林紘一・丹生  
越子・伊藤茂・山形秀樹・Zauri Lomtadze・Ineza Jorjolani）。炭化材樹種  
同定は植田弥生、炭化種実の同定は新山雅広、プラント・オパール分析は鈴木  
茂による。なお、分析全般にわたり藤根久、佐々木由香の指導を受けた。